

第30回国際津波シンポジウムを開催しました (2021/7/7)

テーマ：東日本大震災10年，津波科学，レジリエンス，防災対策，防災教育，災害伝承
場所：東北大学 災害科学国際研究所（宮城県仙台市 + オンライン）
URL：<https://site2.convention.co.jp/30its/index.html>

1. 概要

第30回国際津波シンポジウムが，令和3年7月1日から3日までの3日間，東北大学災害科学国際研究所で開催され，「東日本大震災から10年～経験と教訓を未来の世代につなぐ」をテーマに，津波防災に関する科学・技術，教育啓発に関する最新の知見，さらに課題や解決策などが話し合われました。今回のシンポジウムには国内外19カ国の大学や研究機関の津波研究者160人の参加があり，特に初日は一般参加の150人もオンラインなどで加わり，総勢300人を超える過去最大の規模となりました。震災10年を迎えた被災地仙台での40年ぶりの開催，ということで注目度も高く，シンポジウムは会場（対面）での発表に加え，同時通訳によるオンライン配信も組み合わせ実施されました。新聞や放送による取材，報道も活発に行われ（会場取材10社18人，オンライン取材登録8社13人），津波防災の未来に向けた展望を広く共有する機会になりました。

2. 初日企画（開会式，基調講演，特別セッション）

開会式では，来賓の郡和子仙台市長，共催側からIUGG国際津波委員長 谷岡勇市郎教授（北海道大学地震火山研究観測センター長），および実行委員会委員長である今村文彦教授（東北大学災害科学国際研究所所長）から，それぞれ本シンポジウムの目的や意義，さらには期待についての挨拶があり，「東日本大震災からの10年間，より良い復興に向けて取り組んできた。世界の津波研究を先導する場として，安全・安心なレジリエント社会の実現につながる議論を期待したい」「世界レベルの議論から得た知見を地域に生かし，世界の防災文化向上につなげてほしい」とのメッセージを頂きました。

この後，2015年の国連総会において「世界津波の日」として制定されたことを受けて創設された「濱口梧陵国際賞」の受賞者3名による基調講演が行われました。「津波研究に何が求められているか～東日本大震災から10年の視点」と題したセッションであり，まず，エディ・バーナード博士（前アメリカ海洋大気庁太平洋海洋環境研究所長）から，「津波対策：犠牲者ゼロは可能か？」と題して，世界レベルの津波観測，2004年インド洋津波以降の津波科学や避難対策の実態，さらに黒潮町の津波防災活動の事例も含めた，海外研究者ならではの講演がありました。引き続き，アーメット・ヤルシナー教授（トルコ共和国 中東工科大学）からは，「沿岸災害における評価・認知・レジリエンス」と題して，沿岸災害評価の重要性，地中海における最近の地震津波の被害実態および沿岸防災対策（構造・非構造）の現状の紹介がありました。最後に，柴山知也教授（早稲田大学理工学部）から，「津波・高潮災害現地調査の最近の展開」と題して，2004年インド洋津波から2018年スダ海峡津波に至る津波・高潮被害の研究を踏まえて，今後の防災・被害低減への研究展望が紹介されました。講演後のパネルディスカッションでは，越村俊一教授（当研究所 災害ジオインフォマティクス研究分野）がコーディネーターとなり，今後の科学的知見の防災への役割や，様々なリスクに対してレジリエントな社会を構築するための課題についての議論がありました。リスク評価の信頼性を上げ，危険地域から移動するような空間デザイン戦略が必要であるが，リスクのタイプによりその地域が異なるという難しさがある，といった議論が展開されました。また，警報は命を守り（saving life），レジリエンスは地域を守る（saving community）という視点が認識されました。

3. 東日本大震災特別セッション

このセッションは，東日本大震災の知見と教訓をどう生かすかをテーマとして，最新研究および復旧・復興などの実践の現場からの講演でした。まずは，震災10年を振り返り，10年前には予測できなかった地震・津波の実態や，現在の観測網の充実などの改善状況，津波火災，黒い津波，サイレント津波など今回の津波の特徴と今後の防災・減災への課題と教訓，さらには国内外への対策が示唆されました。また，最後の講演では，津波によって小舟が米国西海岸まで漂流し，これが両国の新たな交流（架け橋）を生み，コロナ禍においても支援活動・教育・津波対策などの取り組みを向上させるための活動が精力的に行われている，という紹介がありました。

以下に講演者と演題をまとめます。

講演1. 佐竹健治教授（東京大学地震研究所長）

「2011年東北地方太平洋沖地震：不測の事態を将来の災害に生かす」

（次頁へつづく）

講演2. 越村俊一教授

「2011年東北地方太平洋沖地震津波災害からの教訓と津波に強い社会に向けた展望」

講演3. アブドル・ムハリ博士（インドネシア国家防災庁）

「2011年東北地方太平洋沖地震津波から10年：巨大地震の教訓とインドネシアにおける非地震性津波のチャレンジ」

講演4. ロリ・デングレー教授（ハンボルト州立大学）

「カモメ：小さな船がどのようにしてコロナ禍の支援活動・教育・津波の認知を促進しているのか」

4. 学術口頭発表（サッパシー・アナワット准教授（津波工学研究分野）、マス・エリック准教授（災害ジオインフォマティクス研究分野））

社会的な関心が高い日本国内での津波と観測システム、女川原子力発電所、世界津波の日等についての8つの発表が1日目に一般公開されました。その他に幅広く波源、津波警報・観測、数値解析、実験、現地調査、構造物、リスク評価、堆積物、気象津波、防災啓発のセッションで79件（国外36件、国内43件。内訳としてオンライン57件、対面15件、ビデオ7件）の口頭発表がありました。

5. ポスター発表（門廻充侍助教（津波工学研究分野））

今回は、ハイブリッド開催に対応するため、オンラインでポスターセッションを実施しました。口頭発表と同様のセッション募集をし、67件のポスター発表が実施され、オンライン会場では質疑応答も行われました。

6. 若手研究者表彰（Poster Awards）（門廻充侍助教）

津波研究者コミュニティの発展を目的に、若手研究者の研究活動を奨励する Poster Award を初めて設立し、22名のエントリーがありました。選考の結果、牧野嶋文泰博士（富士通人工知能研究所）が Best Poster Award を受賞し、新家杏奈氏（東北大学大学院）および Dr. Salmanidou（University College London）が Poster Award を受賞しました。

7. 企業展示（菅原大助准教授（津波工学研究分野））

津波防災や研究に関わる、建設・電力・造船・コンサルタント・保険・情報通信・研究機関・伝承機関などの12の企業・団体から出展がありました。シンポジウム期間中、現地展示に加えてオンライン会場で、各社から参加者に対してそれぞれの事業内容や技術・製品、研究成果の展示・紹介が行われ、最新技術や情報の共有が図られました。

文責：今村文彦（津波工学研究分野）



郡和子仙台市長



谷岡勇市郎教授



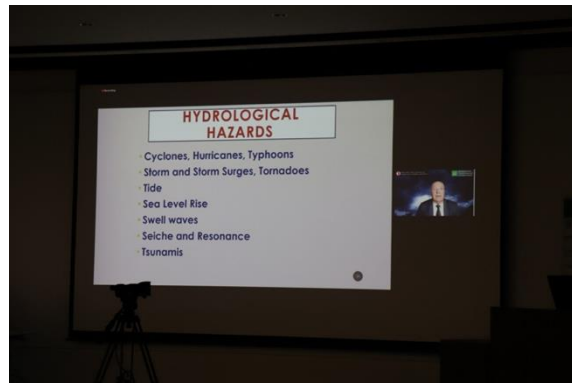
今村文彦教授



会場の様子



エディ・バーナード博士



アーメット・ヤルシナー教授



柴山知也教授



パネルディスカッションの様子



口頭発表の様子



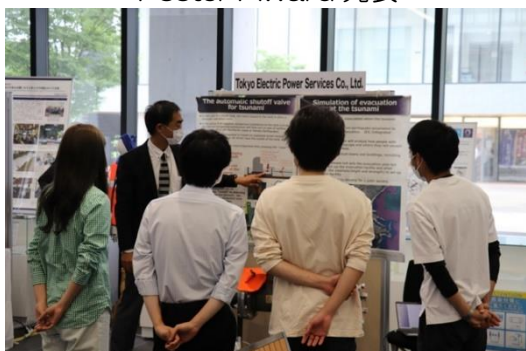
Poster Presentation Viewingの様子



Poster Award 発表



Best Poster Award 発表



企業展示の様子



集合写真